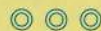


春号
2015
SPRING



會津の
ニナイテ

《会津桐》

特集

会津ものづくりマガジン

軽くて、強くて、
美しい。

会津桐セレクション


会津の春は さくらいろ

日本で最も美しい村《三島町》

奥会津編み組細工

春のかぐわしイベント





会津桐をおさらい

この美肌 日本一

有史以来、日本全国で植栽され、暮らしに利用されてきた桐には、いくつもの優れた特性があります。15~20年で成木になるという育ちの早さ。調湿性を発揮し、燃えにくく、防虫効果や腐りにくさなど素材そのものに備わる機能性。何より、日本人の美意識をくすぐる肌の優美さや、手触りの温かさも見逃せません。しかし良い桐は育つ場所を選びます。それは夏の寒暖差が大きく、冬は厳しい寒さが訪れる地域。これが昔から会津が桐の大産地であり続ける理由です。他にはない粘りと光沢、銀白色でち密な肌を持つ会津桐は、これまで輸入材や新素材に押されながらも産地の努力と知恵でいくども活路を見出し続けてきました。品質の良さ、美しさで知られる会津桐にまつわる物語です。



会津のニナイテ

会津松本
松本恵司さん



「400年続く会津桐の営みはとめない」

会津が桐の産地となったのは、江戸時代初期。産業奨励のため藩による植林が行われたことによります。特に、生育に適した阿賀川・只見川流域から産する桐は良材とされ、切り出された原木の多くが川伝いに新潟へ入り、海路で関西方面へ運ばれました。しかし明治時代になると、両川が合流する会津西部の、喜多方まで鉄道が開通。原木は筏流しで喜多方へ集められ、全国へ陸送されるようになります。喜多方は当時、新たな米沢街道の結節点として、木材をはじめ、漆器、酒、生糸などを扱う商人や職人が集まり賑わいが増していました。「蔵の街」を支える煉瓦造りも盛んに行われたこの頃から、会津桐は時代の追い風を受け、その名声を高めることになったのです。

ここ30年ほど。それまでは原木地で、会津で桐職人といえど下駄職人を指していた」と『会津松本』3代目の松本恵司さんはいます。桐たんすメーカーとして全国に販売ルートを持つ『会津松本』も、初代が70年前に下駄の良材を求め、福島県いわき市から会津へ拠点を移したのが始まり。しかし、恵司さんが3代目を継いだ時代はすでに下駄の需要が減り、家業は同じ材を使った指物でもあるたんす製造へと乗り出していました。それは『会津松本』に限らず、三島や西会津、喜多方

などの流域産地が輸入材に押されがちな原木での販売や製材、下駄づくりだけではない新たな活路を見出すための、会津一円の流れでもあったのです。

ψ「続けることが、つなぐこと」

「風土を活かし、手間を惜しまず育てた桐で、会津産の総桐たんすを造る」ことをめざし、阿賀川・只見川流域で試みられた30年前の挑戦は、生産者と桐加工の技を守る道を拓きました。

これが実を結び、いま桐たんすの産地を問えば、必ず会津の名があがります。一方で恵司さんには懸念もあります。「国内桐の3割は会津産ですが、^{そまびと}杢人(きこり)や生産者が減り、良材が入手しにくくなっている」というのです。

人と、人の技が受け継がれることは、産地を繋ぐことに直結します。「70年続いた家業を守るには、新たなものづくりへ挑まなければ」と恵司さん。「400年続く会津桐の良さを伝えるためには、その営みを止めないこと」。「会津桐たんす」ののれんを掲げ、全国を飛び回る日々は続きます。



桐二段引出し37,800円



60年前の運搬の様子。大桐の上で視線をむける初代の藤太郎さん。後方は2代目太平さん

良い桐と、良い人の技が産地を守る ψ

桐はかつて武家などで用いられ、庶民向けの日用品として下駄や小箱などの材となったのは近代から。なかでも会津でのたんす製造は「おそらく、



上)下駄からスタートした「会津松本」。店内には桐下駄のコーナーも

右上) 重厚な牡丹金具と桐肌が美しい小型たんす280,800円
右) 大小、和洋さまざまなたんす類が並ぶ





会津桐の伝統を、たんねんに大切に、次の手へ。

『会津松本』のたんすは、基本的にオーダーもの。樹齢30年程度の原木を入手しても、一棹のたんすになるまで早くも2年。製材、乾燥、木取り、加工と完成まで約10もの工程を要します。約30年をかけて培ってきた恵司さんの経験と、熟練の桐職人の技がいま、次の世代を担う2人の息子さんに引き継がれようとしています。「伝統的な桐たんすのニーズは根強いのですが、それだけでは、いまの生活スタイルになじまない。会津桐を守るために新しい商品の開発



左)仕上げの「研の粉」を塗る作業。この工程で生まれる、表面の艶やかさも桐タンスの魅力 右)オイル仕上げのチェストにも、伝統的な桐ダンスの技が活かされる

製材から組み立て、塗り、金具の取り付けまでできるのは1か月に一棹。



は必須です」と恵司さん。全国に出向き、使い手と向き合うなかで生まれた品はチェストやベッド、北欧風のシングルチェアまで多数。桐の持つ美しさや機能性と確かな技で、新しい生活空間を提案します。



next!

桐のベビーチェアは4代目・大蔵さんの新作。「肌が温かく、やさしい手触りで、軽く持ち運びしやすい桐は、小さな子供に向いている」と考え、チャレンジをはじめたばかり。今後のシリーズ展開に期待!



桐には「あく」が含まれる。「あく」主成分はタンニン。天然の防虫剤だが桐を長く使用すると黒ずむ原因になるため、製材後に「あく」を減らす渋抜き作業は欠かせない。「会津松本」では、一旦湯水に浸した後、約半年～1年、風雨にさらす天然乾燥、さらに熱風をあてる人工乾燥で水分量をできる限り抑えていく。こうして桐材はようやく職人の手へ渡される



恵司さんの想いは、長男・大蔵さん、二男の亘平さんへと受け継がれていく



会津松本東西館

「古今東西の良いもの」を揃えた店舗は、明治時代の養蚕農家を移築した豪壮なもの。飯盛山と東山温泉を結ぶ街道沿いにあり、自社の会津桐たんすのほか、古家具や古陶器、桐下駄も。

会津若松市慶山1-14-53
TEL 0242-28-3100
AM9:30 ~ PM5:00
定休日 / 火曜

